2022 年度　日本児童教育専門学校　学校関係者評価委員会　開催記録

１．日時　令和 4 年 9 月 28 日　16：00～17：00
２．場所　日本児童教育専門学校　A62 教室
３．委員等氏名及び所属

【委員長】
花村　嘉信　　株式会社 NOTCH　代表取締役

【委員】
請川　滋大　　日本女子大学家政学部児童学科　教授
遠藤　祐太郎　有限会社ビネバル出版/北欧留学情報センター

【陪席】
大河 芙美　　株式会社　Kids Smile Project　保育事業ユニット 保育グループ マネージャー
岡崎　早苗　株式会社チャイルドステージ　人事研修部　マネージャー
桑原　洋一　社会福祉法人どろんこ会　　運営本部　本部長
中山　利彦　社会福祉法人 省我会 新宿せいが子ども園　副園長
藤田　ひとみ 株式会社こどもの森 まなびの森保育園幡ヶ谷　園長
阿久津　摂　日本児童教育専門学校　副校長
中西　和子　日本児童教育専門学校　教務部長・保育福祉科学科長
鈴木　八重子 日本児童教育専門学校　総合子ども学科学科長
紅葉　真幸　日本児童教育専門学校　事務次長

【事務局】
芝井華子、武田眞祐美

◆議事要約◆

1. 委員長挨拶
進行役を務めること。本日の流れについて説明した。

2. 自己評価について説明
事務局の武田より、資料の確認と本日は重点目標について説明する旨を確認した。
その後、重点目標についての説明を資料に沿って行った。

3. 教学マネジメントの取り組みについて
本校の教学マネジメントの取組について、副校長の阿久津より説明を行った。

4. 外部に向けた発信（HP・LINE・YouTube 等）
本校が取り組んでいる、外部に向けた発信について、副校長の阿久津より説明を行った。

学校の公式 YouTube 等を視聴。

5. 意見交換

本校の取組について、委員の方々よりご意見をいただいた。

◆　請川委員

・大学はのんびりしており、何もしなくても学生がくると思われているが、現実は厳しい。特に教育保育分野は厳しい。人材の確保が困難で、小学校の教員不足も深刻。2004年から現職に就任したが、当時よりも入試倍率が下がってきている。

・情報発信については、大学が大事だと思っている部分で HP を作ると、内容が硬くなってしまう傾向にある。読んでもらえないと意味が無い。

・日本児童教育専門学校では、SNS 等の発信について、どうしたらアクセスしてもらえるのかを研究して取り組んでいる。

・教学体制については、大学でやっていることと変わらないシステムを構築していると感じた。

・大学でも3ポリシーは重要視しており、入試の際にも意識せざるを得ない。

・学生は2月の入試まで待っていない。自己推薦や、学校推薦などで進路が決まっていて、2月の入試で入るのは半分以下。2月に勝負を掛けるのでは遅い。

・APを明確にすることで、どういう学生を取りたいのかを高校や学生に伝えて、作文などを出してもらって判断している。

・自分たちの学校が“どのような学生を育てたいのか”を考えていくことが、新入生を確保するうえでも生きてくるのではないか。勉強させてもらった。

◆　遠藤委員

・YouTube 登録数を更に増やしていく方向が望ましい。

・現状は、インスタフォロワー数は多いが“イイね”が少ない。

・工夫すればもっと増える。写真も工夫すると更にぐっと増える。

◆　紅葉委員

・サムネイルを研究している。

・保育の様子など、保育現場の写真協力をお願いしたい。

◆　花村委員

・共有事項を通して共通することとして、日本児童教育専門学校は“業界貢献”を意識している。

・保育士を目指す学生が減っている昨今、保育士の魅力伝えることと、学生を支援することが繋がっている。

・就活で日本児童教育専門学校と関わっており、様々な取り組みを進めているとは聞いているが、あらためて既に連携していると感じている。現場に落としているのでは。

・養成校が担うべき責任と領域は広い。小中高と家庭の積み残しを解決しようとしている。

・今の学生は、主体性と自分でという部分が弱い。これは学生が悪いわけではなく、圧倒的に経験そのものが足りていないと感じる。経験値を増やす取り組みとして、現場で様々な経験ができるのはよい。現場の方にも協力してもらいながら、養成校のモデルとして、示してほしい。

◆　大河委員

・TikTok、YouTube も突破口が大事。1 回見れば何度も出てくるが、まず最初の 1 回を見てもらわないと始まらない。

・エレベーターの横の掲示板が面白い。教育内容と関係ない視点がいい。“こういう学校”というありのままの姿を打ち出すのが効果的。
・現場でのやりとりの中で、「実習は怖くないよ、就職する前に一段階あって安心に繋がるよ。」ということを見せる？
・園長や本部の人材を採用するときに、「こういう保育園作りたい」といった保育方針を紋切型に話すより、例えば「関西出身だけどヤクルトファンで東京に出てきたいんです」という方が採用につながる。
・保育だけど保育だけじゃない。遊べる人材につながるかどうかが大切。
◆　紅葉委員
・“楽しい学校”を発信したいと思っており、高校生にアピールするにはSNSが有効的だと考えている。では、社会人もそれでいいのか？そもそも社会人は“楽しい学校”を求めているのか？分けて考えた方がいいのか。ご意見をいただきたい。
◆　大河委員
・夜間部の学生に、どうしてこの学校を選んだのか聞いたときに、年齢が高くてもハードル低く通えるという回答があった。
・昼間働いて夜間に通っている学生も楽しんでいる。休憩時間が楽しそう。ぜひ撮影してその様子を発信してほしい。
◆　花村委員
・今回の委員会とは別に、広報会議をしてもよいかもしれませんね。
◆　岡崎委員
・7年前くらいまでは、自分で情報取りに来る学生が多くいた。ある程度情報を発信していれば、こちらが望む人材が見に来てくれていた。
・最近は、実習したらそのまま実習先に就職するケースが見受けられる。知り合いの伝手でもなんでも活かして、自分からもっと探してほしい。
・自分にマッチングする企業を探してほしい。どの園も“指針”をもとにやっているが、手法が違うので、是非見に来てほしい。
・大事にしていることを発信している。保護者向けのものも。しかし、それだけだと考えが古いかもしれない。
・発信することに迷いはないが、価値観や考え方を発信するだけではなく、一度見においでというところまで落とした方がいいのか。それで、求める人材がきてくれるのか疑問が残る。
◆　桑原委員
・軽さがとってもいい。素晴らしい。
・自社の研修では動画サービスを行っているが、自社のために作ったものはバズらない。日本児童教育専門学校が保育士資格を目指す人のために作るのが結局結果になる。
・“イイね”を押すとチャットが始まるツールがあるので、活用をお勧めする。
・研修で話してもらう内容は、「独楽の回し方」「たくあんの作り方」「干し柿の作り方」などの他に、「授乳、嘔吐処理の正しいやり方」など、就職後も不安に感じていることなども様々。“イイね”を押すと何らかのコミュニケーションが始まるというのもあり。
・キャリアアップ研修は、他社の方も誘って14時間の講義を40講座実施している。
・研修後にリフレクションの場を設けたところ、オフラインでずっとしゃべっていて、とても交流が深まった。そのような会社を超えた仲間、学校を超えた仲間というのも良いかもしれない。そこからビジネス

チャンスが生まれるかも。

◆　中山委員

・夜間部の授業を受け持っている。

・授業では「なぜ保育士資格を取得しようと思ったか」といったレポートを毎回課している。

・ほぼ全員が回答。志が高くピュアな理由が多い。昼間は保育補助をしていたり、ビジョンが明確にある人が多い。

・そういった声を掬い上げて発信するとよい。資料提供します。

・授業とは別の他の研修で使うこともある。学生の声を受け止めて、現場の先生が対応しないと就職したときにしょげてしまう。

・夜間部の学生のモチベーションの高さに感心している。アナログで直球投げると打ち返してもらえる。

・学生とのやり取りを広報でまとめて、発信したらいい。日本児童教育専門学校の夜間部の評価は高いです。

・伏せ寝したら減点。寝ていたら教師がパフォーマンスもしないと。

・講師の方の動画を発信するなども良さそう。

◆　藤田委員

・近年、養成学科が無くなっていることもあるが、学生が少ないと育ってくる保育士も少ない。

・就職しようとしても、どこに相談していいかわからず、結局家族に相談する。

・保護者からの評判や、園のインスタ等、興味ある人はみるが無い人には情報が届かない。

・相談に乗ってくれる人がいるよ、繋がれるよ。というのもアピールポイントになるのでは？

・就職先には人間関係がいいところが望まれている。仲間がいるから乗り越えられる。実習で折れそうになっても、仲間、先生が支えてくれたというのが大事。

・保育の現場に就職した人に、なんとなく入りましたという人はいない。保育者になることを目指して学び、就職した人には、夢をかなえられたね、がんばっていこうと話せる。

以上、終了時間となり、散会となった。